

巻 頭 言

鈴木 徳 男

二〇〇六年は生涯に残る意味を持った年であった。あくまで個人的体験であるがそれを記して研究年報創刊号の巻頭言としたい。

私は、和歌文学を専門にしており、なかでも平安時代後期を代表する歌人、源俊頼の著した歌学書『俊頼髓脳』を研究対象のひとつにしている。一般にこの作品を読む場合、古典文学のシリーズ例えば日本古典文学全集『歌論集』所収の活字本で読む。底本は国立国会図書館蔵の写本で、祖本は藤原定家が七十三歳の嘉禎三年（一二三七）に写した本であり、それを応永一六年（一四〇九）七月五日に写したものに拠っていることが奥書からうかがえる。従って「定家本」と呼称されてきたが、江戸時代後期の写しである国会図書館本は嘉禎の原本から何度かの転写を経たであろうと思われる。書写をくり返した末流の伝本によってしか読むことができない。古典文学を学ぶ常であろうけれども成立時点からすると七百年後の写本で研究を進めなければならない状況にある。専門家はせめて定家の時代に近い写本の出現を待望していた（詳細は全集の解説や拙著『俊頼髓脳の研究』思文閣出版などを参照）。

二〇〇六年八月一〇日の各新聞で、嘉禎三年の定家書写の本が発見されたと報じられ、いくつかの紙では一面を飾った。定家筆の奥書のカラー写真を掲載した朝日新聞の見出しには「定家が写した歌学書 冷泉家で『俊頼髓脳』発見」とあり、記事は「藤原定家の流れをくむ冷泉家で、定家が鎌倉時代に写したとみられる歌学書『俊

頼髄脳」が見つかった」と書き出されている。京都新聞などには、二十三代の冷泉家当主為臣氏が翻刻出版を準備していたが原稿を残し一九四四年に戦死、刊行の夢がかなわなかった事情も紹介された。

この定家本『俊頼髄脳』は冷泉家時雨亭文庫の貴重書を影印で公開している叢書に収められることになり、私は解題を担当するひとりになった。影印の刊行によって研究が画期的に進むことはまちがいない。まさに冥利に尽きる出来事であった。実は新聞報道の前であったが原本を拝見する機会があった。冷泉家（公家住宅である邸は重要文化財）の一室で、緊張しつつ一枚一枚めくっていった。定家が写したのは初めの部分だけで他は別の人

が写しているが、筆跡をたどるうちに八百年前に書き写した人の息づかいが感じられ、その思いが伝わるような気がした。心が震えるとはこのことであろう。俊頼がこの書を著してから百二十年後にかの定家が写した本。それがはるか後代の今、目の前に存在する。人生の意義を感じた時間であった。

定家の真筆との出会いは、あれこれ説明する言葉を失うほど神々しい瞬間であった。人文科学研究所の活動に関わる本年報が人間の真実の営みやその息吹を伝える成果になるよう念じている。